

## アメリカにおける漢方の認識

Anzai & Associates 安西 英雄

### はじめに

薬への渴望は人間の歴史とともにある。古来権力者が不老長寿の神薬をはるか東方の国に求めたように、現代のわれわれも難病への特効薬を求めて熱帯の密林から深海の海底までを渉猟する。それが人間の本性に深く根ざした行為であるのなら、ある社会が別の文化圏で行われている医療に関心を示すのはきわめて自然なことであろう。異なった文化背景を持つ医療を、自己の文化の中心にある医療に対比させて、代替医療と呼ぶことも不思議なことではない。したがって日本人には馴染みの深い漢方もアメリカにおいては代替医療の中に包含される。

本稿ではアメリカにおける代替医療の現状を概観し、その背景を考察し、漢方の浸透度について初期的な情報を提供する。アメリカの状況を理解する一助として頂ければ幸甚である。

### 1. 代替医療とは

アメリカ国内でまだ普及していない世界中のすべての医療が、アメリカでは代替医療と呼ばれることになる。ゆえに代替医療の内容を網羅的に説明することは難しい。

NIH (National Institutes of Health) は補完代替医療 (complementary and alternative medicine) という表現を用い、それを「治療や医療行為であって、医学部で広く教えられておらず、病院で一般的に行われてはならず、健康保険の償還を通常は受けないもの」と緩やかに定義し<sup>(1)</sup>、内容に応じて別の医療体系、心身療法、生物学に基づいた療法 (内服療法)、手技による・身体に基づいた方法、エネルギー (気) 療法、の5つに分類している (表1)<sup>(2)</sup>。

表1 NCCAMによる代替医療の分類

分類	具体例
Alternative Medical Systems	Traditional Oriental Medicine (Acupuncture, Herbal Medicine, Oriental Massage, Qi Gong) / Ayurveda / Other traditional Medical Systems (Native American, Aboriginal, African, Middle-Eastern, Tibetan, Central/South American) / Homeopathic Medicine / Naturopathic Medicine
Mind-Body Interventions	Hypnosis / Dance, Music, or Art Therapy / Prayer / Mental Healing
Biological-Based Therapies	Herbal therapies/ Special Diet Therapies (Dr. Atkins, Dr. Ornish, Dr. Pritikin, Dr. Weil) / Orthomolecular Therapies (Magnesium, Melatonin, Mega Vitamin) / Biological Therapies (Laetrile, Shark Cartilage, Bee Pollen)
Manipulative and Body-Based Methods	Chiropractics / Massage Therapy / Osteopathic Manipulation / Therapeutic Touch
Energy Therapies	Biofield Therapies / Qi Gong, Reiki, Therapeutic Touch / Bioelectromagnetic-Based Therapies / Unconventional Use of Electromagnetic Fields

このようにアメリカは実に多彩な医療手段を代替医療の視野の中に収め、研究の対象として、さらにヘルスケアの一翼を担う可能性のあるものとしてとらえている。

## 2. アメリカにおける代替医療の浸透

### 1) 代替医療の浸透

この10年ほどアメリカでは代替医療が驚くべき勢いで伸張してきたが、アメリカ医学界がそれを認識したのは1993年のEisenbergの論文が契機であるとされる。論文によれば1990年の1年間にアメリカ人がカイロプラクターなど代替医療施設へ訪問した回数はかかりつけ医師（primary care physician）への訪問回数より多く、代替医療を受けるために支払った金額は病院入院のための自己負担額にほぼ匹敵したと推測され、代替医療の驚くべき浸透ぶりが初めて明らかにされた<sup>(3)</sup>。

1997年にも同じグループが同じ手法で再度調査を行った。それによると代替医療の普及はさらに進み、代替医療施設への訪問回数は47%増加し（図1）、代替医療を受けるために支払った金額は45%増の212億ドル、うち自己負担額は122億ドルとそれぞれ増加した（図2）。

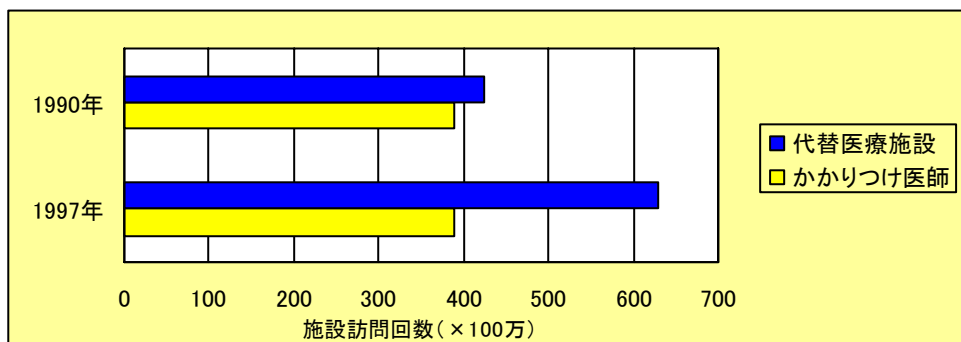


図1 代替医療施設への年間訪問回数の推移(Eisenberg, 1998)

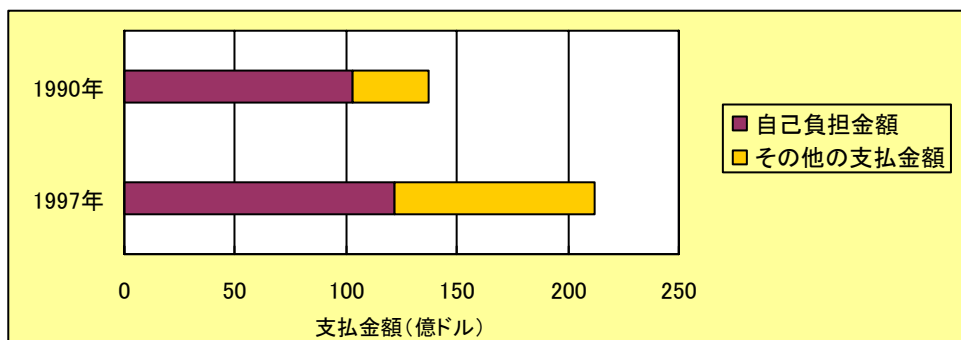


図2 代替医療受診時の支払金額の推移(Eisenberg, 1998)

すべての代替医療のための自己負担支出額は270億ドル、3兆円超と推計され、すべての医師への支払いの自己負担額に匹敵する大きさになった<sup>(4)</sup>。日本の一般用医薬品の年間生産金額8千億円、医療用医薬品の年間生産金額5兆4千億円（いずれも平成11年度）と比較するなら、この金額の大きさが実感できよう。

### 2) OAMの設立とNCCAMへの発展

このようなアメリカ国民の消費動向の際立った変化を受けてNIHは代替医療の科学的な研究と評価のために1992年代替医療局（Office of Alternative Medicine; OAM）を設け、OAMはさらに1999年国立補完代替医療センター（National Center for Complementary and Alternative Medicine; NCCAM）に格上げ改組

された。NCCAMの予算は2002年には1億ドルを超えることが見込まれ、公募により潤沢な研究費が研究グラントとして大学や企業に供与されている<sup>(5)</sup>。2001年には鍼に関するテーマ6件、ギンコー・ピローバ4件、カイロプラクティクス3件、脂肪酸2件、オウゴン2件など計123件がNCCAMからこの研究グラントを受けた<sup>(6)</sup>。またNCCAMは代替療法の臨床研究43件について患者のリクルートも支援しており、様々な形で代替医療の研究と評価の進展を図っている<sup>(7)</sup>。

### 3) DSHEA の成立

1994年にダイエタリー・サプリメント健康教育法(Dietary Supplement Health and Education Act; DSHEA)が成立し<sup>(8)</sup>、食品の中にダイエタリー・サプリメント(以下DS)という新たなカテゴリーが設けられた<sup>(9)</sup>。それまでは医薬品として承認を取るしか適法に販売する道がなかった生薬製剤などの多くの製品がこうして消費者に効能を伝えながら販売できることになり、DSの普及は爆発的に加速された。その後DSの効能表示に関する詳細な規制<sup>(10)</sup>、製造ガイドラインであるDS-GMP(Good Manufacturing Practice)の案<sup>(11)</sup>、生薬製剤を医薬品として承認申請するためのガイダンス案<sup>(12)</sup>などが発表され、法規制の環境は一層整いつつある。

### 4) 既存の主流医学界の反応

代替医療浸透の影響はメインストリームの医療の側にも及んだ。代替医療に関心を持つ患者層が急速に拡大するにつれ医師も代替医療について勉強せざるを得なくなり、さらに代替医療を診療の一部に取り入れる動きが芽生えた。

こうしてアメリカ医科大学協会所属の125大学のうち代替医療についての授業や卒後教育コースを設ける大学が75大学に至り<sup>(13)</sup>、ハーバード大学、アリゾナ大学、デューク大学、スタンフォード大学、メリーランド大学、コロンビア大学などのそうそうたる大学が競うように代替医療研究センターを設立した<sup>(14)</sup>。また病院やクリニックがカイロプラクティクス、鍼灸、ヨガ、マッサージ、瞑想などの専門家を擁し、統合医療(integrative medicine)と標榜するのが盛んになってきた。

### 5) DS の普及

最近の調査によれば2000年のDS市場は168億ドル、約2兆円規模と推計され、アメリカ人の59%がDSをいつも服用しているという驚くべき普及率に達した<sup>(15)</sup>。

DS市場の最大のカテゴリーはビタミン製品でDS全体の35%(59億ドル)、次に生薬製品がDS全体の25%(41億ドル)を占めた。すなわちアメリカ人の15%、およそ6人に1人は生薬DSを服用しているという計算になる。最近の成長分野はスペシャルティ・サプリメントと呼ばれるカテゴリーで、グルコサミン、メラトニン、DHEA、Co-Q10、SAM-eなどの成分がここに該当する(表2)。

特筆すべきはDS服用者の33%が医師のアドバイスで服用するようになったことで、DSの有用性を認める医師が増えつつあることがわかる<sup>(16)</sup>。

表2 ダイエタリー・サプリメントの売上金額(2000年)

カテゴリー	売上金額(億ドル)	内訳(%)
Vitamins	59.0	35
Herbal & Botanicals	41.2	25
Meal Supplements	21.4	13
Specialty Supplements	16.7	10
Sports Nutrition Products	15.9	9

Minerals	13.9	8
Total	168.1	100

(Nutrition Business Journal, 2001)

### 3. アメリカにおける健康意識の変遷

DSの急速かつ持続する浸透ぶりを見るとこの現象の基盤には社会的な必然性があるに違いないと思われる。DS消費を牽引しているのは高学歴高収入の白人女性ベビーブーマーであると言われるが<sup>(3)</sup>、この世代の健康意識の変遷の中にその背景の一端を垣間見ることができる。

1950年代、アメリカ人にとって良い食事とはたくさんの肉とポテトであった。60年代には加工食品が盛んになったが学生運動の影響で自然なものに価値を見出す思想が広がり自然食品を尊重する基盤ができた。同じころ塩分やコレステロールと循環器疾患の関係が次第に認識され始め、消費者は食物により関心を払うようになった。

70年代には消費者はさらに運動の効能を認識するようになり、ジョギングやスポーツクラブが盛んになった。80年代には生活が豊かになりグルメの楽しみを知り、一方でサラダなど低脂肪、低塩分、低糖分の食事がもてはやされ、食事への関心は一層深まった。

一方このころまでに消費者は医療についてかなりの知識を身につけた。60年代の混乱期を体験した消費者は医療の権威から自立するのも容易だった。高騰する医療費と営利優先の健康保険制度に不満を募らせ、消費者は自分の健康は自分で守ろうという姿勢を強めていった。それを敏感に感じ取った病院や企業は相次いで健康情報の提供を進め健康専門のウェブサイトを開いた。こうして史上初めて消費者の多くが自分の病気や治療について自分自身で調べる社会が生まれた。

やがて厳格な食事節制にやや疲れた消費者は、90年代後期になって日ごろは節制しながらも自分の判断で時には豊かな食事を楽しむようになった。

ベビーブーマーの消費者たちはこのような試行錯誤を通して健康と栄養について学習し、食事ですそれをコントロールし、運動ですそれを補うことを覚えた。DSの登場は食事による栄養コントロールを補う心強い援軍であり、消費者はそれらを文字通り自家薬籠中のものとしつつある<sup>(17)</sup>。

アメリカの新聞やテレビの健康情報の質と量は日本をはるかに凌駕している。アメリカ人全体の健康に関する認識が底辺から日々向上していることは疑いない。代替医療の急速な浸透の背景にはこのように長年にわたって培われた堅固な社会的基盤と要請があるものと考えられる。

### 4. アメリカにおける漢方の認識

アメリカの多種多様な代替医療の中における漢方の浸透度をできる限り相対的に客観的に示すため、インターネットのウェブサイト数を指標に用いる。アメリカではインターネットの世帯普及率が50%を越え、既に日常生活の必需品となっている。社会の各セグメントの関心の度合いがその中に投影されていると考えることができる。

#### 1) 漢方とTCMの浸透度

各種のデータベースや人気のヘルスサイトなどで漢方について検索した。対照として伝統中国医学 (traditional Chinese medicine; TCM) についても同じ検索を行いヒット数を比較した (表 3)。漢方は「kampo」とし、TCMは「Chinese medicine」として検索した。

表3 漢方とTCMについてのヒット数

データベースなど	漢方	TCM	URL
NIH	6	114	<a href="http://www.nih.gov">http://www.nih.gov</a>
Medline/PubMed	270	5,016	<a href="http://www.ncbi.nlm.nih.gov/entrez/query.fcgi">http://www.ncbi.nlm.nih.gov/entrez/query.fcgi</a>
CHID Online	7	339	<a href="http://chid.nih.gov/simple/simple.html">http://chid.nih.gov/simple/simple.html</a>
IBIDS	185	1,697	<a href="http://ods.od.nih.gov/databases/ibids.html">http://ods.od.nih.gov/databases/ibids.html</a>
Dr Koop	0	3	<a href="http://drkoop.com">http://drkoop.com</a>
WebMD	0	180	<a href="http://webmd.com">http://webmd.com</a>
HealthWorld Online	1	50	<a href="http://www.healthy.net">http://www.healthy.net</a>
Mothernature	0	1	<a href="http://mothernature.com/HN_Index.process?temname=home">http://mothernature.com/HN_Index.process?temname=home</a>
Vitaminshoppe	0	111	<a href="http://www.vitaminshoppe.com">http://www.vitaminshoppe.com</a>
WholeHealthMD	0	2,357	<a href="http://www.wholehealthmd.com">http://www.wholehealthmd.com</a>
Google	19,800	660,000	<a href="http://www.google.com">http://www.google.com</a>

NIHのホームページで漢方を検索すると6件ヒットする。いずれも漢方という言葉だけが短く記載された程度のもので、漢方の内容はほとんど伝えていない。TCMは114件あり、国立医学図書館（National Library of Medicine）が一昨年TCMの特別展を行い神農や黄帝の絵や傷寒論などを展示していたことがわかる。Medline/Pubmed、CHID Online、IBIDSはいずれもNIHの医学文献データベースであるが、漢方はTCMにはるか及ばない。以上のような事実は医療専門家の間での漢方の認知度のレベルを反映していると考えてよい。

Dr. Koop、Web MD、Health World Onlineは人気の高いヘルスサイトでアメリカの消費者はこのようなサイトから必要な医療情報を収集するが、漢方については情報が得られない。Mothernature、Vitaminshoppe、Whole Health MDは主要なDSのインターネット販売会社のサイトであるが、漢方の情報も製品もない。これらは一般アメリカ人社会への漢方の浸透度をあらわしている。

以上のように、漢方は医療専門家と一般消費者とを問わず、アメリカ社会に浸透しているとは言えない、というのが一般的な結論になる。

## 2) 漢方に言及したウェブサイト

見方を変えて、漢方を認識している主な企業、大学、団体などを紹介する。Googleで「kampo」を検索すると真っ先にツムラの英文サイトが出てくる<sup>(18)</sup>。ここから漢方についての情報を得るアメリカ人も多いものと思われる。本草製薬もHonso USA, Inc.を介して漢方製品をアメリカで販売しており<sup>(19)</sup>、いくつかのウェブサイトにその製品広告を見出すことができる。

大学としてはテキサス大学<sup>(20)</sup>、モンタナ州立大学<sup>(21)</sup>、ミシガン大学<sup>(22)</sup>に漢方に触れたウェブページがある。鍼灸のサイトには漢方の記事が時折見られ、Acupuncture Todayには日本漢方の現状についてよくまとまった解説がある<sup>(23)</sup>。その他ヘルスサイト<sup>(24, 25)</sup>、DS業界紙<sup>(26)</sup>、出版社<sup>(27)</sup>なども漢方について説明を載せている。

## 3) 処方言に言及したウェブサイト

処方名でGoogle検索をすればまた別の情報が得られる。例として小柴胡湯（Sho-saiko-to）で検索して見出せるウェブサイトをいくつか紹介する。

HIV感染者支援団体PWA Health Groupのサイトには小柴胡湯の解説がある<sup>(28)</sup>。ヘルスサイトHealth Notesには小柴胡湯と抗エイズ薬 3TCの相乗作用<sup>(29)</sup>と小柴胡湯とインターフェロン併用時の副作用<sup>(30)</sup>についての記事がある。HIVと肝炎のサイトにも小柴胡湯が記載され<sup>(31)</sup>、癌情報のサイトには肝硬変から肝臓への進展予防の比較臨床試験の解説がまとめられている<sup>(32)</sup>。

このように特定の関心を持って代替医療を切実に探し求めている人々にとっては、漢方は魅惑的な未知の医療の一つであるのだろう。

## まとめ

概観してきたように、アメリカ社会の健康観の進展とともに代替医療はヘルスケアの手段として脚光を浴び、多種多様な代替医療が社会に急速に浸透しつつある。

生薬製剤もアメリカ人の生活になじみ、研究者も行政もその扱いを学んだ。識者の指摘するとおり製品の規格化、医薬品との相互作用、法規のさらなる整備など様々な課題は残されているが<sup>(33)</sup>、漢方の受け入れ環境は10年前に比較すると格段に改善し、漢方に関心を寄せる人々も各界各層で増加している。

しかしその他の代替医療の浸透と比較すると漢方のアメリカにおける普及は緩慢で、一般の医療専門家や消費者の間ではまだまだ漢方の認知度は低く、西洋生薬やTCMの後塵を拝している。

代替医療がアメリカで正統な医療の一部として認められるには、研究の蓄積によって有用性を証明し、ゆくプロセスが不可欠であろう。カイロプラクティクスも鍼灸も西洋生薬製剤もこれまで着実にその努力を進めてきており、一步ずつ信頼を獲得しその評価を高めてきた。

漢方もまた、アメリカで臨床評価が行われるようになって初めて、一つの可能性ある医療として広く認知されるようになるのではないだろうか。

最後に前出のEisenberg氏が好んで引く箴言を引用して結語とする<sup>(34)</sup>。

“Real gold does not fear the heat of even the hottest fire.”

## 文献・URL

- (1) <http://nccam.nih.gov/fcp/faq/index.html#what-is>
- (2) <http://nccam.nih.gov/nccam/fcp/classify>
- (3) Eisenberg DM, Kessler RC, Foster C, Norlock FE, Calkins DR, Delbanco TL.: Unconventional medicine in the United States. Prevalence, costs, and patterns of use. N Engl J Med, 328 (4) pp246-52, 1993.
- (4) Eisenberg DM, Davis RB, Ettner SL, Appel S, Wilkey S, Rompay MV, Kessler RC: Trends in Alternative Medicine Use in the United States, 1990-1997 - Results of a Follow-Up National Survey. JAMA, 280 (18) pp 1569-75, 1998
- (5) <http://nccam.nih.gov/fi/research/guidelines>
- (6) <http://nccam.nih.gov/research/grants/rfb/fy01.htm>
- (7) <http://nccam.nih.gov/ne/clinical-trial>
- (8) <http://vm.cfsan.fda.gov/~dms/dietsupp.html>
- (9) <http://ods.od.nih.gov/whatare/whatare.html>
- (10) <http://vm.cfsan.fda.gov/~dms/ds-labl.html>
- (11) <http://www.supplementinfo.org/industry/cgmp.htm>

- (12) <http://www.fda.gov/cder/guidance/1221dft.htm>
- (13) [http://www.ama-assn.org/sci-pubs/msjama/articles/vol\\_280/no\\_9/joc80673.htm](http://www.ama-assn.org/sci-pubs/msjama/articles/vol_280/no_9/joc80673.htm)
- (14) <http://www.integrativemed.org>
- (15) <http://www.supplementinfo.org/industry/marketplace.htm>
- (16) [http://www.supplementinfo.org/latest\\_news/survey\\_results.htm](http://www.supplementinfo.org/latest_news/survey_results.htm)
- (17) [http://www.ecrm-epps.com/charliepres/Wellness\\_May'01/Approaching.htm](http://www.ecrm-epps.com/charliepres/Wellness_May'01/Approaching.htm)
- (18) <http://www.tsumura.co.jp/english/kthp/today.htm>
- (19) <http://honso.com/distributors/Default.htm>
- (20) <http://www.uthscsa.edu/mission/spring98/kampo.html>
- (21) <http://www.montana.edu/wwwrjf/cam/2.htm>
- (22) <http://www.med.umich.edu/1libr/topics/alt01.htm>
- (23) <http://www.acupuncturetoday.com/archives2001/aug/08kenner.html>
- (24) <http://www.healthy.net/asp/templates/article.asp?PageType=Article&ID=962>
- (25) [http://www.holisticonline.com/Remedies/Depression/dep\\_kampo.htm](http://www.holisticonline.com/Remedies/Depression/dep_kampo.htm)
- (26) [http://www.healthwellexchange.com/nfm-online/nfm\\_backs/Nov\\_00/blends.cfm](http://www.healthwellexchange.com/nfm-online/nfm_backs/Nov_00/blends.cfm)
- (27) [http://www.naturalhealthnotebook.com/Alternative\\_Medicine/Biological%20Therapies/history\\_of\\_herbal\\_medicine.htm](http://www.naturalhealthnotebook.com/Alternative_Medicine/Biological%20Therapies/history_of_herbal_medicine.htm)
- (28) <http://www.aidsinfonyc.org/pwahg/info/sskt.html>
- (29) <http://www.thedacare.org/healthinfo/Drug/Lamivudine.htm>
- (30) <http://www.thedacare.org/healthinfo/Drug/Interferon.htm>
- (31) [http://www.hivandhepatitis.com/hep\\_b/treatment/alternative.html](http://www.hivandhepatitis.com/hep_b/treatment/alternative.html)
- (32) <http://www.cancerconsultants.com/TreatmentNewsUpdates/Liver%20News/LiverSept95.htm>
- (33) Goldman P: Herbal Medicines Today and the Roots of Modern Pharmacology. *Annals of Internal Medicine*, 135 (8) pp594-600, 2001.
- (34) <http://www.bidmc.harvard.edu/medicine/camr/>